The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベンヤミン　破壊・収集・記憶
Author(s)	三島, 憲一
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58084
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【16】

氏　　名	三島憲一（みしまけんいち）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２４２４４　号
学位授与年月日	平成22年９月27日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	ベンヤミン　破壊・収集・記憶
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　中山　康雄 （副査） 教　授　Wolfgang Schwentker 教　授　檜垣　立哉

論文内容の要旨

ヴァルター・ベンヤミン（１８８９～１９４０）の思想は、マルクス主義、ユダヤ神秘主義などの立場から実に多様に解釈されているが、本論では、そうしたさまざまな立場のどれかひとつに矮小化せずに、ドイツ青年運動、新カント派、ドイツ・ロマン主義、ユダヤ神秘主義、バロックのアレゴリー、ボードレールからプルーストを経てシュルレアリスムまでのフランス・モダニズム文学、ブレヒトの戯曲手法、西欧マルクス主義など、ベンヤミンの思想を成り立たしめているさまざまな極の組み合わせ（コンステレーション）として捉える手法を取った。特に、ドイツ青年運動と新カント派の思想がベンヤミンにおいて、アレゴリー論、ユダや神秘主義、モダニズム文学と矛盾なく出会う局面の理解に努めた。そのなかでもなにより新機軸といえるのは、モダニズムとユダヤ神秘主義とがアウラや瞬間や救済の概念において融合している地点の指摘である。

第一章「ベルリンの幼年時代」では、晩年の「ベルリンの幼年時代」や「ベルリン年代記」を参考にしながら、ボードレールに即してジャングルとして捉えられた都市の記憶が、プルーストの回想や記憶の手法で描き出されているさまを「幸福」のイメージを中心に分析した。

第二章「精神の反抗」では、新カント派とドイツ青年運動がベンヤミンのなかで生産的に交わる地点が実はユダヤ精神とつながることを、当時の時代背景とともに描いた。

第三章「言語と神学への沈潜」では、ショーレムとの交流で吸収したユダヤ的な言語神秘主義をドイツ・ロマン派に読み取るベンヤミンの試みを「ロマン主義の中心であるメシアニズム」という表現から出発して詳述した。

第四章「法、神話、希望」では、ユダヤ神秘主義とドイツ・ロマン主義のベンヤミンにおける出会いが時代のなかでどのような実りをもたらしたかを、「暴力批判論」およびゲーテの『親和力』を論じた長いエッセイの分析を通じて論じた。

第五章「アレゴリーとメランコリー」では、第一次世界大戦後の政治文化状況でアクチュアリティを帯びだしたバロックを、ベンヤミンがアレゴリーとメランコリーをキー概念に解き明かすさまを論じた。「ドイツ悲劇の根源」をいうときの「ドイツ悲劇」とは、彼の時代の、特に第一次世界大戦とその直後の状況を解き明かす言葉、つまり、「ドイツの悲劇的状況」を意味する言葉でもあることは、これまであまり指摘されてこなかった。

第六章「ベンヤミンの方法」では、アレゴリー、破壊、収集、記憶・追想の関連を、ユダヤ神秘主義とボードレール、プルースト、シュルレアリスムの枠内で理解しうることを論じた。モダニズムと神秘主義が知的急進性において出会うことを軸に据えた本章は、本書の最も重要な部分である。

第七章「評論家ベンヤミン―ワイマールの坩堝のなかで」では、多産な文学評論家としてのベンヤミンの活動をワイマール共和国の知的コンテクストに位置づけるとともに、彼独自の「救済批評」の概念を分析した。

第八章「亡命とパサージュ」では、いわゆる『パサージュ論』とアウラ概念の関連から、最後の「歴史の概念」に関して、モダニズムとメシアニズムの出会いという観点からの読み替えを行った。

最後の節「終わりに」では、ベンヤミンのメシアニズムの独自性を、「歴史的現象としての神秘主義は危機の産物にほかならない」というショーレムの言葉を手がかりに、追求した。１９世紀中葉の南西ドイツにあったパレスチナ移住運動、１９世紀終盤のアメリカ・インディアンのスー族を中心とするメシアニズムなどとの比較から、ベンヤミンのメシアニズムはいかなる民族的定位ももたないことを浮き彫りにした。

論文審査の結果の要旨

申請者三島憲一の博士学位論文『ベンヤミン　破壊・収集・記憶』は、1998年に出版された著作に大幅に加筆・修正することにより完成されたものである。その意味で本申請論文は、長年にわたる申請者のベンヤミン研究の集大成だと言える。本学位論文は、八章の本文の前に「プロローグ」を設け、最後に「終わりに」において全体をまとめる形になっており、537ページという博士学位論文にふさわしい大作となっている。

ベンヤミン解釈には、従来、マルクス主義的観点を重視するものとユダヤ神秘主義的観点を重視するものとの二つに分かれることが常であり、全体的ベンヤミン像が描かれることはほとんどなかったと言える。申請者は、第一章での幼年期の記述や第二章での青年期の記述を土台にしながら、ベンヤミンの「コンステレーション」（星座的配置）という技法の適用の仕方を説明している。このコンステレーションという技法は、それまで歴史上別の文脈に置かれていたものを、同一の場に配置することにより生まれる新空間のことである。作品の創造ではなく、コンステレーションによる配置による創造というものがあることをベンヤミンの仕事は示している。ベンヤミンの批評には、批評や翻訳の意味そのものを哲学的に解明する姿勢が同時に秘められている。申請者は、このようなベンヤミンの作品の解釈の新しい視点を本論文により構築したと言える。これは、ベンヤミン個人の解釈を超えて、解釈作業そのものに関わるような申請者の洞察だと考えられる。

本申請論文において特徴的なのは、ベンヤミンのみでなく、彼が生きたヨーロッパ文化全体が描かれているところにもある。幼年時代には、１９世紀末期から２０世紀初期へのベンヤミンの生家のブルジョア文化が描かれる。また、フランス文化から入ってきたシュルレアリスムやフランス・モダニズムの文化も描かれる。そして、1910年代にドイツ青年運動と接するベンヤミンの姿が、ユダヤ神秘主義から受ける影響とともに語られる。そして1930年代のナチス・ドイツの台頭と支配力拡大の影響が文化現象という内部の位置から語られる。このような記述は、ヨーロッパ現代史および文化史を広くそして深く理解している申請者だからこそできるものである。

ベンヤミンの著作は理解困難であり、ベンヤミンは解釈することが困難な思想家である。申請者はこの困難さが偶然ではないことを明らかにしている。つまり、ベンヤミンの思想には、複数の相いれないように思われる視点が同時に並列的に現れてくる傾向がある。これが、申請者が言うコンステレーションである。申請者は、現代思想の第一人者ハーバマスによるベンヤミン解釈などにも、この申請者の観点から批判を加えている。ベンヤミンの思想は一元化されない複合的なものであり、その思考技法は、論理学を基盤にしたものではなく、アレゴリーや神秘的感覚に従ったものである。このような技法にとっては、何を題材とし、それをどのように選択し配列するかが決定的になってくる。題材としては、ボードレールやプルーストやユダヤ神秘主義や革命的政治思想やバロックのアレゴリーなどが選ばれた。不思議なことにベンヤミンにおいては、ユダヤ神秘主義がシュルレアリスムなどの最先端の文化現象と連動して現れてくる。申請者は、おそらくベンヤミン自身にとり最も自然で好ましいやり方で彼の思想を解釈している。申請者は、そのようなベンヤミン解釈の有力で示唆的な視点を本申請論文で提供することに成功した。またこの方法論は、解釈そのものの問題に対する新しい問題提起となっている。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。